

# ゆにゆに

UNIVERSITY UNION

2010年1月1日

通巻1124号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会  
〒920-1192 金沢市角間町  
TEL076-262-6009 角間内線2105  
E-MAL karazawa@ku-union.org



## 金沢大学版 地球の歩き方

現在、第50次南極地域観測隊（JARE50）の越冬隊員（宙空部門）として昭和基地に来ております。金沢大学は、南極観測と縁の深い大学のひとつで、これまでに6名（？）くらいの関係者が観測隊員としてこの地を踏んでおられるようです。最近では、理工研究域の尾崎さんが47次隊で来られ、49次隊には元理学部で越冬2回目の青山さん（現在、極地研）もおられました。42次隊では、技術支援センターの久保さんが映画「南極料理人」の舞台になったドームふじ基地で活躍されています。次に行かれる方あるいは行ってみたいと思われる方がおられるかもしれませんので、昭和基地についてご紹介します。

昭和基地は、南緯69度00分22秒、東経39度35分24秒の東オングル島の上にあります。南極大陸から約4km沖にありますが、夏を除き海が厚い氷で覆われたため、雪上車などで簡単に大陸へ渡ることができます。言い換えると、昭和基地周辺には氷が薄くなる夏しか近づくことができません。そのため、越冬隊は次の夏が来るまで帰ることができず、孤立してしまいます。ある意味、私は究極の「南の島」へ単身赴任していることになります。島にはヤシの実どころか、植物を感じさせるものはありません。荒れ果てた大地で、ゴツゴツした岩肌が目立ち、映画で見た火星に来たのではないかと思えるぐらいです。

基地の各建物には冷凍倉庫のような扉が付いており、中が暖かいので最初は妙な感じがしました。室内は+20°Cくらいで、外は-40~0°Cです。南極で生活するのに欠かせない物資や燃料は、船に積んで持ってきていますが、水は発電機の熱を利用して、雪を溶かして作ります。少しづつしかできませんので、ここでは水はお酒よりも貴重品です。また、ゴミはすべて分別して持ち帰ります。

### ＜南の島 「昭和基地」＞

香川 博之（理工学域）



図1 来る途中で見た氷山



図2 ヘリから見た夏の昭和基地と南極大陸



図3 第50次越冬隊（28名）



図4 雪上車（内陸旅行隊）



図5 アデリーベンギン

燃えるものなどは専用の設備を使って灰にして持ち帰ります。日本にいたときには、お恥ずかしながら、ここまで徹底して節水やゴミ分別を行っていなかったように思います。

基地の周辺には、夏が近づくとペンギンやアザラシがやってきます。よく見るのはアデリーベンギンで、気づいたら作業している自分のすぐ後ろにいたこともあります。大きさは30~70cmくらいと小さく、海氷上を列になつて移動している姿は、保育園の子どもたちがお散歩をしているようです。大きさが100~130cmもある皇帝ペンギンがやって来ることもあります。冬が近づくと、動物は暖かい北方へ行って見られなくなりますが、蜃気楼やオーロラなど壮大でとてもきれいな自然現象を見ることができます。極夜で太陽が昇らなくなると、吸い込まれそうになるような星空をほぼ1日中堪能できます。

昭和基地は大陸沿岸にあるため、動物や氷山など景色を楽しむことができますが、内陸へ行くと「雪原」と「空」以外は何もありません。曇ってくると、その区別がつかず、一面真っ白に見えます。こうなるとホワイトアウトといって、目の焦点が合わず気持ち悪くなります。これは、吹

雪いておらず、視程が30kmあったとしても起こります。雪上車を運転しているとき、何か見えたと思ったらフロントガラスに埋め込んである電熱線だったこともあります。そんなときでも、目印としてルート上にところどころ置かれている旗やドラム缶が視野に入ると、いきなり目のピントが合うから不思議です。面白いことに、オートフォーカス・カメラも同じ状態に陥ります。

とにかく、南極は何につけてもスケールが大きく、人間のすることが、とてもちっぽけに感じてしまいます。日本ではインフルエンザが流行しているそうですが、南極では病原体すら繁殖できないため、風邪をひくこともありません。ブリザードで強風が吹くときには、中途半端ではありません。毎日、厳しい環境の中で、壮大で美しい景色を眺めていると、「財布、鍵、イライラ」という言葉が頭からすっかり消えた今日この頃です。

お越しの際には、準備と訓練をくれぐれもお忘れのないようお願いします。



図6 オーロラと星空



図7 史上最大風速を観測したときの様子

# 音楽の小窓



香港ポップス・「歌詩」の世界  
—達明一派・黄耀明と香港社会の変遷—

国際学類・法学系 倉田 徹



「我等着你回来」

香港の大衆文化と言えば、ブルース・リーやジャッキー・チョンに代表されるアクション映画が有名ですが、実は音楽においても、香港は独自の地位を築いています。香港で勃興した広東語の流行音楽は、1980年代以降、対外開放の始まった中国大陸にも浸透しました。長きに渡り文化沙漠であった中国で、香港音楽は広東語を解さない大多数の中国人の間でも人気を博し、最近まで中国の人気歌手の大部分は香港出身者で占められたのです。

大陸の経済発展と大衆文化の自由化により、その地位は相対的に低下していますが、香港音楽は今も大陸にない独自の魅力を保っています。

例えば、香港音楽は歌詞と曲の関係にも細心の注意を払います。中国語は声の高低で意味が変わる声調言語で、標準中国語が4種類、広東語は少なくとも6種類の声の高さを区別します。これが歌になった場合、通常標準中国語では、歌詞の声の高低を無視して曲を歌いますが、香港音楽では、高音の漢字には高音、低音の漢字には低音の音符がふられ、詞と曲が美しくシンクロします。香港音楽の作詞・作曲が非常に繊細な芸術であることが分かります。

また、幼稚なほどに分かりやすい大陸の流行曲の歌詞に対し、香港の歌詞は文語を多用します。このため、作詞家という職業は芸術家として高く評価され、過去には黄霑、現在では林夕などの人気作詞家が活躍しています。こうなると、香港音楽の歌詞は、「歌詞」というよりも、「歌詩」と表現するほうがしっくりきます。

そんな香港の人気歌手の中でも、特に異色の世界を作り上げたのが、劉以達（ギター）と黄耀明（ボーカル）のコンビで1985年にデビューしたバンド「達明一派」でした。達明一派はその後解散と再結成を繰り返していますが、二人とも音楽活動を続けており、特に黄耀明は現在もほぼ毎年1枚のペースで新作ソロアルバムを発表しています。

達明一派・黄耀明の個性は、奇抜なファッションや变幻自在の曲調にも現れます。何と言っても歌詞の面白さにあります。彼らが扱うのは香港社会の様々な側面の、ちょっと斜に構えた描写です。ファッションに熱中する女性をあざ笑う「神奇女？」では、地下鉄駅を闊歩する女性の「ねー見て見て、私の格好、ちょっと中森明菜に似てるでしょ」という独り言の台詞を入れてみたり、大人気歌手の張學友がサザンオールスターズの「真夏の果実」をカバーした「每天愛？多一些（毎日君をもっと愛す）」が大ヒットすると、「每天？愛多一些（毎日君はもっと愛す）」を発表し、「君が僕にどういう態度をとっても、僕は永遠に、永遠に……って、こんな感じか？」との台詞で、愛の言葉を迫る女性に埒のあかない態度をとる男性を演じてみたりと、思わず笑わせる演出たっぷりです。



「神經」



「萬歲萬歲萬歲コンサート」

その一方で、中国への返還問題に揺れた香港の世相を、えぐるような言葉で表現する曲も多数発表しました。「今夜星光燐爛」は、夜の街をあてもなく車で疾走する若者の姿を描きます。香港の夜景の美しさに心奪われながらも、彼は最後「走りながら心に疑問がわいた、この街の輝きは、これで終わってしまうのではないか」とつぶやき、アップテンポで飛ばしてきた曲も消え入るように終わってしまいます。1997年中国返還を前にした、香港市民の普遍的な不安がよく描写されています。「今天應該很高興」では、主人公は一人古いアルバムをめくっています。数年前のパーティに集まつた友人は、皆返還を恐れ米国や豪州に移民していました。ネオンに飾られたクリスマスの香港で、主人公は彼らの外国暮らしを想像しつつ、「今日は楽しいはずだ、幻が心にさえあれば」と繰り返すのです。天安門事件の翌年発表された「天問」は、銃声を思わせる打楽器の音や、スピーカーからのわめき声で事件を演出し、天の怒りの炎の舌を弓で射たとの表現で、学生が中国政府を怒らせたことを形容します。「天を怨んでも、天は問うことを許さない」が、この曲の結びの台詞でした。

香港にとって1997年返還の意味はあまりに重く、香港映画にもその影は多く見られます。達明一派の音楽も、中国共産党の統治下に入ることを恐れ続けた香港市民の心理を大いに反映していると言えるでしょう。



# 沈まぬ太陽

監督：若松 節朗 監督：西岡 琢也  
出演：渡辺 謙、三浦 友和、鈴木 京香、松雪 泰子、石坂 浩二  
上映時間：3時間22分

(写真：劇場/パンフレットより転載)

橋 洋平（附属図書館医学系分館）



ここ数年、「白い巨塔（2003年）」「女系家族（2005年）」「華麗なる一族（2007年）」そして現在放送中の「不毛地帯（2009年）」と山崎豊子原作の長編小説のテレビドラマ化がブームのように続いている。クイズやバラエティ番組など軽いノリの番組が持てはやされる一方、その反動で、山崎作品のような骨太の作品が求められているのだろう。

そういう中、昨年10月に映画「沈まぬ太陽」が公開された。この作品は、原作が2001年刊ということもあり、映像化されるのは、今回が初めてである。山崎作品が映画化されるのは、意外なことに、1976年の「不毛地帯」以来である。これは、山崎作品がどれもあまりにも長大かつ見せ場の連続で、連続ドラマには向いていても、映画の枠に収めるのが難しいことを反映していると思われる。

「沈まぬ太陽」もそういう作品である。原作は文庫本5冊。しかも、舞台はカラチ、テヘラン、ナイロビ、御巣鷹山、東京、大阪…とダイナミックに動き回る。下手をすると、落ち着きのないスパイ映画、もしくは味の薄い総集編のようになってしまふ。

内容的にも難しさを持っている。舞台となる企業名を国民航空という架空の名称に置き換え、「この作品は、フィクションです」と断ってはいるものの、1985年の御巣鷹山での死者500名以上を出した航空機事故をそのまま描いている部分がある限り、日本航空という特定企業の抱える問題点を描いていることがはっきり分かつてしまう。そういう問題作をどう映画化するのか？この作品は、そういう難しさに挑んだ作品である。その結果、途中10分の休憩を挟む3時間を超える異例の大作という形に結実した。



山崎作品の多くには、主人公と彼が属する組織・家族・ライバルという3つの軸に主人公の生きた時代という時間軸を加えて描くという共通点がある。その背景には、常に理想と現実の対立の構図がある。主人公は、清々しく理想に向かうが、現実の重さに翻弄される。



「沈まぬ太陽」も、このパターンで捉えることができる。渡辺謙演じる主人公の恩地元は、日本を代表する航空会社の職員組合の代表として労働条件の改善のために尽くすが、それが会社上層部の反感を買いつける。常識的にはあり得ない海外勤務が続く。数年後、御巣鷹山事故が起こる。そこで恩地は遺族として、様々な遺族と接する。ドラマ後半は、事故後の会社の建て直しの話になる。国見新会長の下、恩地は会長直属の会長室部長に抜擢され、会社再建のために尽くす。しかし、その結果は…。

主人公・恩地のライバルとして三浦友和が演じる行天という人物が登場する。真に会社のことを考えているのは恩地なのだが、出世をするのは行天の方である。この2人は色々な局面で擦れ違うが、時間と共に正反対の人生を歩み始める。この恩地と行天の絡み合いがこの映画のいちばんの見所だった。特に恩地を演じた渡辺謙の野性味と誠実さを兼ね備えた演技には、大作の主役に相応しいカリスマ性があり、ドラマの核となっていた。

彼らを取り囲む、強い存在感を持った多くの脇役も充実していた。実は、今回、長い原作を読みながら映画を観たのだが、活字で描かれた人





物がどう映像化されるのか、誰がキャスティングされているのかを予想するのが面白かった。どの人物もキャラが立っており、なるほどという配役ばかりだった。

今回、渡辺、三浦以外のキャストを敢えて調べずに見たのだが、後半初めて登場する国見会長役の石坂浩二など「これしかない」というはまり役だった。不幸な役柄でお馴染みの木村多江、出番は少ないが常にインパクトの強さを残す品川徹など、唐沢寿明版「白い巨塔」を観た人にも「なるほど」と思わせるような配役だった。その他、加藤剛、宇津井健などのベテラン俳優たちの演技もドラマを厚みのあるものにしていた。

ストーリー自体は、大勢の人が亡くなった大惨事を扱っている部分があるので、「面白い」とは言えない。映画全体の印象も重厚である。ただし、各シーンが頻繁に切り替わり、過去・現在を行き来し、場所が転々とするので、話が停滞しない。重いけれども、重くのしかかっては来ない。そのバランスがとても良い。

特に前半での緊張感が途切れることのない力強いストーリー展開が見事だった。アフリカの自然と飛行機事故現場とが生々しくダイナミックに交錯し、セリフではなく、映像に語らせる映画ならではの手法が新鮮だった。事故と事故後の遺族の描写も、映画冒頭から緊迫感に満ち、随所で涙腺を刺激する。抑制が効いていたので、かえって強く企業の体質の問題点を浮き彫りにしていた。ただし、これらは小説の読後に観たから、そう感じたのかもしれない。映像の細部で、小説で数ページを取って描いていたようなシーンが出てくるが、そういう細部のこだわりは原作を読んでいないと分からないものである。

その点、会社の中のシーンが増え、純粋な企業ドラマになる後半はやや尻すぼまり、という感もあった。ただし、単純な勧善懲悪でなく、人間の運命の皮肉を感じさせる辺りに大作を締めるのに相応しい余韻を感じた。原作では、特定の大企業の「悪い体質」を鋭く執拗に描いていたが、映画版では、大企業のあり方を攻めるよりは、主役2人の数奇な運命の浮き沈みにより強く焦点を当てていた。最終的に、多くの経験を積んだ恩地の成長と出世のみを考えてきた行天の生き方の空しさとが対比されることになる。

この映画を企業ドラマとして観ると、個々の社員からのボトムアップでも、経営者によるトップダウンのどちらでも体質を改革できなかった事例を描いた作品と言える。組織を変えるとはどういうことなのだろうか?と考えさせてくれる。日本航空については、近年、経営再建問題が大きな問題となっている。「この作品は、フィクションです」と言いながらも、観る人の多くに大組織の変革の難しさをリアルに伝える作品となっていた。恐らくは、大学という大組織にも通じる部分もあるだろう。その意味で、教職員組合向け広報誌の中で取り上げるのに最適の作品と言えそうである。

P.S. この作品の話題の一つ「途中10分の休憩」ですが、少々期待外れでした。「風と共に去りぬ」のように、バーンと前半が終わると思ったのですが…テレビのCMに入るよりもさり気ない切り方で「休憩?」という感じでした。劇場向けに、もう一工夫欲しかったところです。

### 読んでみませんか?

この映画は、小説と共に、できれば読んでから見るとよりリアルに味わうことのできる作品です。原作本は、附属図書館中央図書館開架913.6:Y19:1~5の書架にありますので、関心のある方はお読みください。

その他、「しぶちん」「白い巨塔」「大地の子」「暖簾」「花のれん」なども入っていました。ちなみに今回の映画は、「角川映画」なのですが、原作は「新潮社刊」です。ちょっと不思議なケースです。

(附属図書館医学系分館・橋 洋平)



あひあめの♪

# ちよっとリレは店

イタリアンレストラン  
「AMORÉTTO」

趙 菲(外国語教育研究センター)

**AMORÉTTO**とはイタリア語で、「友達以上恋人未満」のことをいいます。

山側環状線の田上町交差点から太陽が丘に向かい、ほんの少し行くと、明るくて優雅なイタリアンレストラン「AMORÉTTO」があります。閑静な住宅地にあるこの店は1年前にオープンしたばかりで、外見はお店というより、上品なお家という感じです。周りは商店も一般住宅も密集しておらず、長閑な田園風景をまだ建物の合間から覗くことができます。秋の清澄な空の青さの下、AMORÉTTOの扉を開ける気持ちはとても清々しいものです。

店内は明快なイタリア的デザインでラインが整っています。とりわけ薔薇色のイスは、程良い情熱の持ち主のように客の足を癒します。テーブル席ももちろんですが、カウンター席も設定されており、一人でも気軽に楽しめます。この店を切り盛りするのは三野さんご夫妻、ご主人がシェフで、奥さんは店内の世話をしています。笑顔を絶やさない奥さんはとても気の付く方で、小さい子供に玩具や食べやすい料理を提供したり、時には話し相手にもなったり、親が料理を楽しむ時間を得られるように気にかけてくれます。

**AMORÉTTO**の料理は優しくて、忙しさで疲れきった心を慰めてくれます。

サラダは季節の野菜を多く用いて美しく盛り合わせられ、それにチーズと自家製のあっさりしたドレッシングがかけられ、口の中が一気にフレッシュになります。また、オリーブオイルをつけて食べる焼き立てパンは食欲を一層増していきます。パスタはいろいろな種類がありますが、この季節にピッタリのタラバガニのスパゲッティは絶妙な味わいです。クリームとカニがちょうどいい具合に絡み合い、シルクのような滑らかな食感の中に、カニの新鮮な香りが穏やかにじっくりと口に広がります。お勧めの一品です！最後に出されるデザートは色鮮やかで、わくわくさせる味でさらに客を魅了します。

三野シェフからの一言：金大の皆さん、ぜひ味わいにいらしてください。  
さあ、AMORÉTTOに会いに行こう！



住 所：金沢市田上本町23街区10

山側環状線、しあわせの湯交差点より田上方向、うめばちそば

営業時間：Lunch 11:30～14:30 (Last In) / Dinner 18:00～21:30 (Last In)

定 休 日：月曜日(祝日の場合は翌火曜日)、毎月第4日曜日

電 話：076-201-8332 ホームページ：<http://www.amoretto-web.com>

## ○○○編集後記○○○

今期1号のゆにゆには内容が濃いです！南極の昭和基地のご紹介はなんと興味深いものでしょう。保育園の子供のように観測隊員の後ろに列をなすアデリーベンギンのような可愛い話もあれば、お酒より貴重な水、そして灰にして持ち帰る燃えるゴミなど私たちに反省させられるものばかりです。目の焦点が合わず気持ち悪くなる南極は大変だなと思いますが、風邪を引かないことにはちょっと意外でした。特にこの時期においては一瞬羨ましい気持ちにもなります。また、「香港「歌詩」の世界」をきっかけに香港音楽をじっくり鑑賞してみたいと思います。「沈まぬ太陽」は原作を読んで、映画館に足を運ぶことをこの冬の楽しみにしたいです。AMORÉTTOはぜひ会いに行ってほしいです。 (編集者T)